

## 記述式内膜細胞診報告様式に基づく 子宮内膜細胞診アトラス

平井康夫(総編集)  
矢納研二, 則松良明(編)

国際医療福祉大病理診断センター長/  
国際細胞学会 (IAC) 次期理事長/  
日本臨床細胞学会 (JSCC) 元理事長

長村義之

### 即時に応用可能なアトラス

子宮内膜細胞診を臨床検査として日常的に実施しているのは、国際的にもわが国だけであり、日本での細胞診従事者は、この分野で世界のリーダーとして位置付けられてきた。

本書は、日本臨床細胞学会で作成した全身 26 領域の「細胞診」の中で、婦人科・泌尿器の「記述式内膜細胞診報告様式」にのっとり、これまでに蓄積された知見を網羅して作成され、「背景」「定義」「診断基準」を明記したアトラスとなっている。「診断基準」はわれわれが慣れ親しんでいる子宮頸部細胞診報告様式(ベセスダシステム)の判定基準と同様に活用できるよう工夫されており、使いやすい。また、直接塗抹法のみならず液状化検体細胞診(LBC)にも言及されており、いずれの施設においても即時に応用が可能である。内膜細胞診における LBC の利点も強調されている。

記述式内膜細胞診報告は、(1)陰性/悪性ではない、(2)内膜異型細胞(ATEC)、(3)子宮内膜増殖症、(4)子宮内膜異型増殖症、(5)悪性腫瘍とに整理して分類されている。写真は、細胞診が主たる画像であるが、適宜病理組織画像も貼付され、理解が深まるように工夫されている。写真は美麗であり、その説明も的確と言える。

従来の 3 段階分類(陰性・偽陽性・陽性)において、「偽陽性」とされていたものに関して、記述式内膜細胞診報告様式では、「ATEC」の判定領域を用いることにより、組織診断との整合性を、

臨床医に向けて経過観察や組織診の対応が明らかにされると考えられる。

本書では、わが国で盛んに行われている内膜細胞診に熟達した著者により、ATEC, ATEC-US, ATEC-A などのカテゴリーも、適切な図を使用してわかりやすく解説されている。ATEC の判定基準について、特に判定に苦慮するもの(ホルモンによる変化、増殖性病変)に関しては、多くの写真を用いて解説しており、さまざまなパターンを視覚的に捉えることができ、実際の現場においても大いに活用されると考える。また、今後多くの現場で導入されるであろう LBC 法による写真も数多く掲載されており、標本の種類(作製法)による細胞の差異にも対応できると考えられる。

全体を通して、非常に読みやすい構成となっているので、一度通読し、その後実際の症例に遭遇した際に本書を活用することが勧められる。

本書が、臨床検査技師の方々および細胞病理医の方々の座右の書として、日常の診療において役立つことを大いに期待している。



●B5/頁 176/2015 年  
定価：本体 10,000 円＋税  
[ISBN978-4-260-02409-9]  
医学書院 刊